

史跡松代藩主真田家墓所

——史跡松代藩主真田家墓所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2011（平成23）年3月

長野市教育委員会

史跡松代藩主真田家墓所

——史跡松代藩主真田家墓所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2011 (平成23) 年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、様々な人々の営みが積み重ねられています。数々の歴史の痕跡は、地下に残され、先祖の知恵と文化を現代に伝える貴重な財産となります。

松代藩真田家の城下町であった松代は、武家屋敷や町屋、神社仏閣などの歴史的町並みが残っており、往時の景観を今に伝える城下町として知られています。町の東部に位置する長国寺には、真田家歴代藩主の墓跡と共に、初代信之、四代信弘の霊屋、山門跡や参道敷石などが残されており、江戸時代の大名家墓所を知る上できわめて貴重であることから、昭和62年に境内一帯が国の史跡指定を受けています。

このたび、史跡松代藩主真田家墓所整備事業に伴い、掘削遺構の確認を目的とした発掘調査を実施しました。本書には、調査によって得られた遺跡の詳細を掲載しております。調査成果は、連続と継られてきた松代の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、文化財保護行政に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました長国寺関係者の皆様、当該工事の施工を請け負われた建設業関係者、発掘作業に従事していただいた地元発掘作業員の皆様、そして報告書刊行に至るまでご支援、ご指導を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征 治

例 言

- 1 本書は、史跡松代藩主真田家墓所の保存修理事業に伴って実施された巡蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、宗教法人長国寺と長野市とによる巡蔵文化財遺構確認調査委託契約に基づいて、長野市教育委員会（文化財課）が実施した。
- 3 発掘調査地は、史跡松代藩主真田家墓所（長野市松代町松代1015-1ほか、総面積21,569.71㎡）に位置する。
- 4 調査は史跡内の遺構遺存状況の確認を目的とするものであり、検出遺構は基本的に保存及び保存整備を行っている。
- 5 調査は平成19年度から平成22年度に実施された。調査面積は平成19年度67㎡、平成20年度88㎡、平成21年度30㎡、平成22年度148㎡の計333㎡である。
- 6 史跡地内および遺構の測量は、株式会社写真測量研究所に委託した。遺構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅱ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準点の標高に基づく。
- 7 調査によって出土した遺物は、略番号「MSB」を用いて注記を行い、遺構図版類とともに長野市教育委員会文化財課において保管している。

目 次

序
例言
目次

第Ⅰ章 調査と経過	1
第1節 整備事業に至る経過	
第2節 整備事業の概要	
第3節 調査体制	
第4節 調査日誌（抄）	
第Ⅱ章 史跡周辺の環境	5
第1節 歴史的環境	
第2節 長国寺の歴史概要	
第Ⅲ章 発掘調査成果	9
第1節 調査の方法	
第2節 調査の概要	
第Ⅳ章 結論	33

図 版 目 次

第1図 史跡松代藩主真田家墓所整備事業平面図	2
第2図 史跡松代藩主真田家墓所位置図	5
第3図 発掘調査位置図	9
第4図 山門跡・参道調査区	11
第5図 第1トレンチ調査区（Tr-1）	13
第6図 第2トレンチ調査区（Tr-2）	14
第7図 第3・4トレンチ調査区（Tr-3・4）	15
第8図 第6トレンチ調査区（Tr-6）	17
第9図 第7トレンチ調査区（Tr-7）	18
第10図 第8トレンチ調査区（Tr-8）	19
第11図 信政・幸道墓屋跡周辺調査区全体図（Tr-9～18）	21
第12図 出土陶磁器	27
第13図 出土瓦1	29
第14図 出土瓦2	30
第15図 出土金属製品	32
第16図 真田家墓所平面図	34
第17図 長国寺御霊屋図・墓所区域リライト	36

第I章 調査と経過

第1節 整備事業に至る経過

史跡の指定 松代藩主真田家墓所は、元和8年(1622)上田城主真田信之が松代城主となり、その後、代々城主をつとめた真田家歴代の墓所である。墓所は、真田家の菩提寺である長国寺に営まれている。江戸時代の境内には、初代藩主信之から四代藩主信弘までの霊屋と、三代幸道の母松寿(街)院の霊屋の5棟が存在していたが、現在は初代信之と四代信弘の2棟が残るのみである。信弘霊屋の東部には、土塀を廻した歴代藩主の墓所があり、初代信之以下十二代幸治までの宝篋印塔が並ぶ。霊屋と墓所が一体として遺存しており、江戸時代の大名家墓所を知る上できわめて貴重であることから、墓地として使用されている部分を除いた寺域のほぼ全域について、昭和62(1987)年12月25日に史跡の指定を受けている。

史跡地の現況 真田家墓所の史跡指定範囲は、大きく長国寺の境内地と、その奥(東部)に位置する真田家霊屋・墓所の区域に分けられる。長国寺境内地は、明治5年(1872)の火災により本堂・庫裡・山門等の建物を焼失している。現在の本堂は、明治19年(1886)に再建され、平成15年に改修されたものであり、庫裡は平成5年に再建されたものである。山門は再建されていないが、礎石や参道石畳は現存しており、往時の伽藍配置は、ほぼ推察することができる。一方、真田家霊屋・墓所区域は、明治の火災を免れたものの、二代信政・三代幸道・松寿院の霊屋3棟が移築され、本来の霊屋・墓所としての景観を失っており、加えて霊屋を囲む塀の破損が著しい状況であった。

整備基本計画 長国寺では、このような現況をふまえ、平成17年に整備委員会を組織して、史跡地の保存・管理などを含む整備基本計画を策定した。計画では、建造物の歴史や周辺環境の変遷過程を整理し、保存管理基準および整備事業方針がまとめられた。整備においては、来訪者および文化財の安全確保を目的として、境内地の敷石・参道の修理、霊屋・墓所区域の土塀修理などを早急に進めると共に、史跡としてのふさわしい環境を整備することとした。また、史跡の現状変更に際しては、事前に発掘調査を実施し、遺構面を損しないことを前提とすると共に、長期的な整備方針である霊屋の移築復元を進めるための発掘調査を優先的に実施することとした。

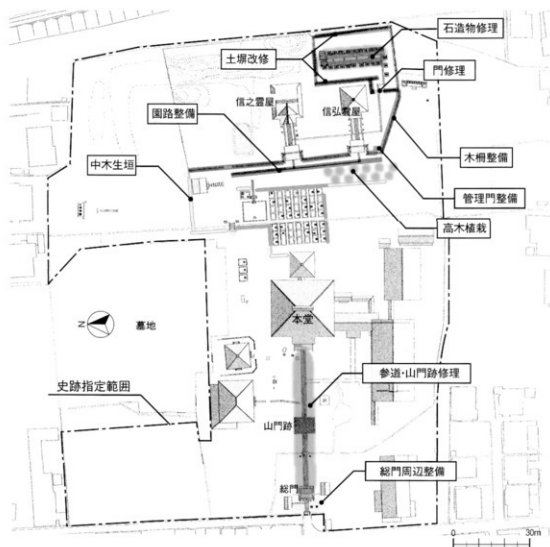
整備事業に至る経過

1872(明治5)年	火災により本堂・庫裡・山門など寺域を焼失
1886(明治19)年	本堂・庫裏(文武学校槍術所を移築)再建
1980(昭和55)年	重文真田信之霊屋解体修理および僧堂改築
1984(昭和59)年	県文真田信弘霊屋解体修理
1988(昭和63)年	鐘樓解体修理、梵鐘新鋳
1992(平成4)年	墓所土塀修理、庫裡再建に伴う発掘調査実施
1993(平成5)年	庫裏再建
2003(平成15)年	本堂大修理
2005(平成17)年	整備基本計画の策定

第2節 整備事業の概要

整備事業概要 長国寺では、平成17年に策定された史跡松代藩主真田家墓所整備基本計画に基づいて、19項目にわたる短～長期の事業計画を定め、このうち平成18年度から平成23年度までの6年計画による短期整備事業を開始した。整備事業では、早急に対応が必要とされていた参道敷石や霊屋・墓所区域の塀を中心に修理工事が進められた。また整備では、遺構確認調査によって判明した明治5年以前の塀や管理門の景観を再現している。

平成18年度 (2006)	史跡整備事業着手、境内全域の測量委託
平成19年度 (2007)	参道敷石修理工事、霊屋塀部分の遺構確認調査
平成20年度 (2008)	霊屋塀・墓所塀修理工事、信弘霊屋表門南側の遺構確認調査
平成21年度 (2009)	霊屋塀修理工事、史跡環境整備工事部分の遺構確認調査
平成22年度 (2010)	石造物等保存修理工事、発掘調査報告書作成
平成23年度 (2011)	墓所土塀改修・総門周辺整備工事、整備事業報告書作成



第1図 史跡松代藩主真田家墓所整備事業平面図

第3節 調査体制

史跡松代藩主真田家墓所整備事業に伴い、整備工事の設計上必要な資料の確認、及び遺構の遺存状況を確認するため、長野市教育委員会に埋蔵文化財確認調査業務を委託した。また、平成21・22年度の調査実施にあたっては、長野市埋蔵文化財センターの全面的な協力を得ている。

(平成19年度～22年度)

長野市	市長	鷺澤 正一
	副市長	酒井 登
長野市教育委員会	教育長	立岩 睦秀 (～H21)、堀内 征治 (H22)
	教育次長	島田 政行 (～H19)、篠原 邦彦 (H20～21)
		酒井 国充 (H22)
長野市教育委員会文化財課	課長	雨宮 一雄 (～H20)、金井 隆子 (H21～)
	局主幹	山口 明 (～H21 (課長補佐)、H22)
	係長	中野 真一 (～H21)、倉石 和彦 (H22)
		飯島 哲也 (～H21)
	主査	北澤 恵子 (～H20)、風間 栄一 (H20～)
		宿野 隆史 (H21～)、淡沢 文 (H21～)
		石坂 公人 (～H21)
	主事	土屋 泰男 (H22)
	専門員	海野 修、清水 竜太
	調査員	北村美弥子

(平成21・22年度)

長野市埋蔵文化財センター	所長	青木 和明
(庶務担当)	係長	北村 嘉孝
(調査担当)	係長	千野 浩
	主査	小林 和子
	主事	塚原 秀之
	専門員	遠藤実実子、山野井智子、小林 由実、木村 夏奈、 山本 賢治、柳生 俊樹、高田亜紀子、西澤 高敏 (H21)

発掘作業員	市川松子、内山弘子、海沼けい子、窪田節子、栗林けい、坂口美知子、高野永子、 多城恵子、多門睦夫、半田芳子、増田益利、峰村昭夫
遺構測量	株式会社写真測図研究所

調査の実施及び報告書の作成にあたっては、事業主体者である宗教法人長国寺の代表役員三村契一氏をはじめとする長国寺関係者の方々には、深いご理解とご協力を賜った。また長国寺に関する絵図史料については、下記の関係機関より数多くの貴重なご指導・ご助力をいただいた。厚くお礼申し上げたい。

調査協力者 松代文化施設等管理事務所 降幡浩樹、米澤 愛、山中きゆり

第4節 調査日誌（抄）

平成19年度（2007）

- 11月27日 トレンチ1調査開始。
- 12月10日 トレンチ2調査開始。
- 12月13日 トレンチ1・2精査、写真撮影、遺構測量（委託）。
- 12月17日 埋め戻し作業。現地作業を完了。



平成19年度調査状況

平成20年度（2008）

- 10月14日 トレンチ設定。
- 10月15日 トレンチ3・4調査開始。
- 10月23日 トレンチ3より墓所参道の門礎石・根石を検出。
- 10月28日 トレンチ4より水路跡検出。
- 10月30日 トレンチ4精査、写真撮影。
- 10月31日 トレンチ6掘り下げ。
- 11月10日 トレンチ3礎石・根石・栗石完掘。精査・写真撮影。
トレンチ6精査・写真撮影。
- 11月11日 トレンチ3・4・6遺構測量（委託）。
- 11月29日 一般見学会。
- 12月1～3日 埋め戻し作業。現地作業を完了。



一般見学会開催状況

平成21年度（2009）

- 10月13日 トレンチ7・8設定、調査開始。
- 10月14日 トレンチ7・8精査、写真撮影。
- 10月16日 トレンチ7・8遺構測量（委託）。
- 10月20日 埋め戻し作業。現地作業を終了。



平成20年度調査状況

平成22年度（2010）

- 10月12日 トレンチ設定、調査開始。トレンチ9写真撮影。
- 10月13日 トレンチ12掘り下げ。
- 10月15日 トレンチ10・11写真撮影。トレンチ13掘り下げ。
- 10月18日 トレンチ12写真撮影。トレンチ14掘り下げ。
- 10月20日 トレンチ13・14写真撮影。
トレンチ15・16・17・18掘り下げ。全体写真。
- 10月25日 トレンチ9～18遺構測量（委託）。
- 11月1、2日 埋め戻し作業。現地作業を終了。



平成22年度調査状況

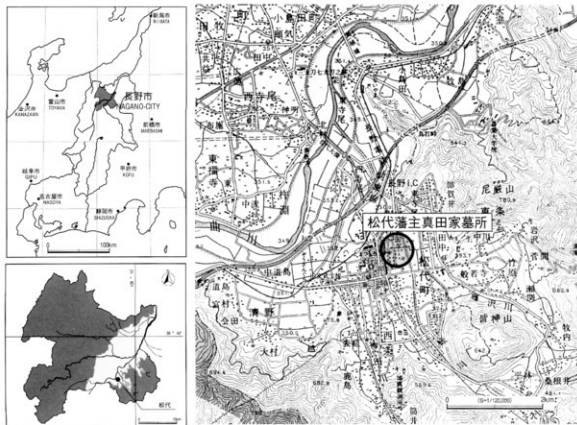
第Ⅱ章 史跡周辺の環境

第1節 歴史的環境

史跡の立地 史跡の存在する長野市は、地形的に中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と、西側の西部山地、東側の東部山地に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約1000万～200万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約40km、最大幅約10km、標高330～360mである。第四紀中頃に形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や、千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

松代の地形 真田10万石の城下町として知られる松代町は、背後に母袋山（標高977.5m）、高遠山（標高1208m）、奇妙山（標高1529.1m）などの東部山地をひかえ、神田川・経川・藤沢川などによって形成された合流複合扇状地上に位置している。扇端部は緩やかな傾斜で上記の3河川は天井川となり千曲川氾濫原に接している。現在の千曲川は松代市街地から離れているが、これは寛保2年（1742）の水害（いわゆる「戊の満水」）により松代城内が激しく損壊した経験から、宝暦2年（1752）以降に千曲川の流路を変更したものである。

松代の歴史 弥生時代や平安時代では、松代町でも東寺尾の松原遺跡や清野の四ツ屋遺跡など、千曲川の自然堤防上に巨大な集落が営まれており、城下町が位置する現在の松代町中心部辺りは居住城として選地されていない。その理由は地形的要因によるものであり、永禄3年（1560）頃に武田方の前進基地として、松代城の前身である海津城の築城以降に人々の集住が盛んになったものと考えられている。元和8年（1622）に真田信之（1566～1658）が上田から松代に移封される頃には、城下町の原型が形成されていたものと考えられる。



第2図 史跡松代藩主真田家墓所位置図

第2節 長国寺の歴史概要

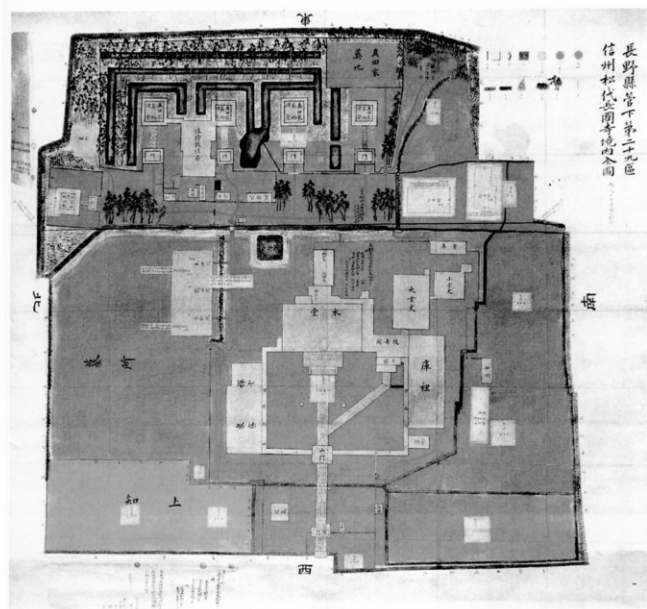
開山と経過 長国寺は、天文16年（1547）、真田幸隆により上州長源禪寺の僧見運を招いて上田の地に開いた真田山長谷寺がはじめとされる。後の元和8年（1622）、真田信之の松代移封に伴って、上田より松代城下の現在地に移され、長国寺と改称された。寛永5年（1628）には、信濃国曹洞宗寺院を統括する総録所を命じられ、総持寺輪住地となった。元禄6年（1693）から廃藩に至るまで、真田家より毎年常法糧料として高200石と薪100駄を寄進されている。

建物の概要 江戸時代の長国寺境内は、本堂を中心に山門・庫裡・禪堂などの建物が回廊で結ばれた寺域と、本堂の奥の水路で仕切られた真田家墓所・霊屋・鐘樓の区域に分けられる。境内の建築物は、享保2年（1717）の関口火事、寛保2年（1742）の戌の満水、明治5年（1886）の大火など、数々の災害を被った。現在、創建当時の位置に残る建物は初代信之霊屋、四代信弘霊屋、鐘樓などごくわずかに過ぎないが、二代信政霊屋は林正寺本堂として、三代幸道霊屋は長国寺開山堂として移築され、現存している。

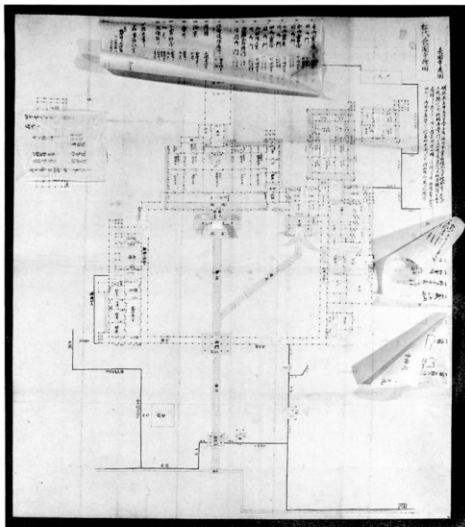
絵図資料 長国寺を描いた江戸時代の絵図資料は、数点確認されており、大きく松代城下の屋敷割図、鳥瞰図、敷地の平面図などが存在する。ここでは、遺構確認調査において参考とした絵図の紹介にとどめる。長国寺所蔵の「信州松代長国寺境内全図」（以下、「境内全図」）及び「長国寺建図」には、1872（明治5）年の火災焼失以前の長国寺境内の建物配置等平面詳細が描かれている。「長国寺図面」には、初代信之と二代信政の霊屋しか描かれておらず、万治3年（1660）から享保12年（1727）までの境内を示す図面と思われる。また、18世紀末の絵師三村白閑斎の筆とされている「松代の図」は、境内全体が鳥瞰的に描かれ、彩色が施されている。



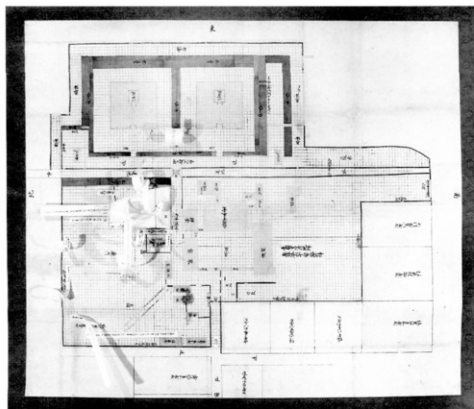
松代の図（松代文化施設等管理事務所蔵）



長野縣管下第二十九区
信州松代長國寺境内全圖 (長國寺所藏)



長国寺建図 (長国寺所蔵)



長国寺図面 (長国寺所蔵)

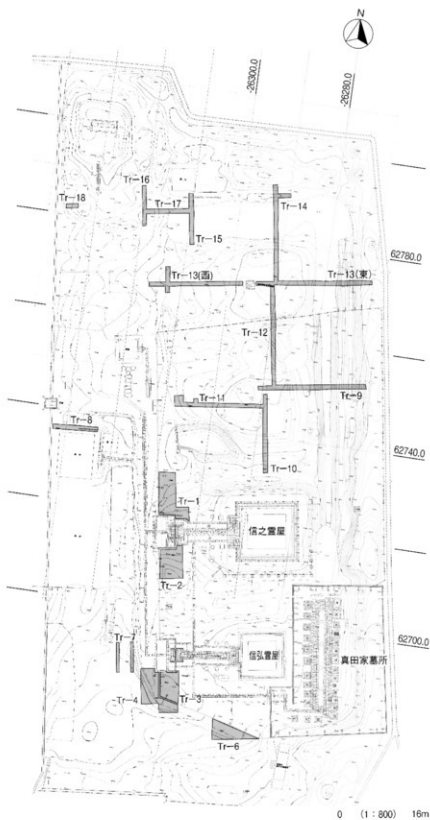
第三章 発掘調査成果

第1節 調査の方法

調査の目的 史跡松代藩主真田家墓所にて実施する発掘調査は、整備事業の実施設計に伴う埋蔵文化財情報の収集を目的としている。調査は、長野市教育委員会に委託されて実施したが、礎石等の遺構は露出していることが多く、掘削深度が浅いため、重機等は使用せず、すべて人力による掘削とした。また、検出された遺構については保存することを基本とし、調査後は保護砂を敷設の上、埋め戻している。

調査の範囲 調査では、長国寺に関する絵図史料の記載内容を現状と比較し、現状と異なる箇所について、遺構確認を実施している。また、山門跡及び参道については、石畳保存整備工事に伴う確認調査を行っており、石畳の劣化状況及び石材下部の地業状況を確認している。

また、整備工事に直接関わらないものの、中長期的な整備を予定している真田家墓所区域の霊屋跡や外周塀、堀跡についても、平成17年度策定の整備基本計画に「優先的に調査」とされており、当該事業に併せて発掘調査を実施している。



第3図 発掘調査位置図

第2節 調査の概要

(1) 全体の概要

調査概要 松代藩主真田家墓所は、南北に流れる水路によって大きく2分されており、歴代藩主霊屋や真田家墓所の石造物群が存在する東側を「真田家墓所区域」、長国寺本堂や庫裡、僧堂、山門跡などの存在する西側を「長国寺日常活動区域」と呼称する。史跡整備事業に伴う発掘調査は、主に真田家墓所区域を調査対象としており、平成19年度から22年度までの4か年に渡り実施された。調査は、工事設計に要する基礎資料としての遺構確認と中長期的な保存整備計画に基づく遺存状況の確認を目的としており、計18箇所にてトレンチを設定している。また、長国寺日常活動区域でも、参道・山門跡の敷石整備工事及び植栽整備工事に伴う立会・確認調査を実施している。調査では、明治5年の火災以降、現在までに様々な箇所で改変されているものの、建物跡や水路跡、掘跡、塀跡など大部分で遺構が検出されており、遺産文化財が比較的良好に遺存していることが判明した。以下、調査区毎に検出遺構の概要を示す。

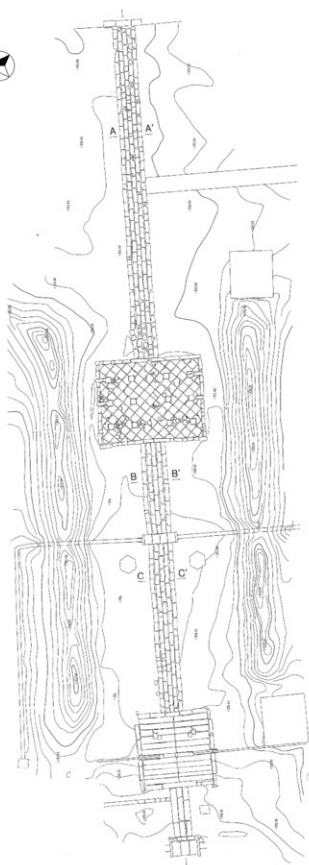
発掘調査区一覧表

調査区	調査年度	調査位置	面積	調査区	調査年度	調査位置	面積
Tr-1	2007	信之霊屋表門周辺(北東)	37㎡	Tr-10	2010	幸道霊屋南部	13㎡
Tr-2	2007	信之霊屋表門周辺(南東)	30㎡	Tr-11	2010	幸道霊屋西部・表門	18㎡
Tr-3	2008	信弘霊屋表門周辺(南東)	26㎡	Tr-12	2010	信政霊屋南部・幸道霊屋北部	17㎡
Tr-4	2008	信弘霊屋表門周辺(南西)	40㎡	Tr-13	2010	信政霊屋東部・西部・表門	39㎡
Tr-5	2008	外周塀基礎確認(未掘削)	—	Tr-14	2010	信政霊屋北部	19㎡
Tr-6	2008	外周塀基礎確認	22㎡	Tr-15	2010	外周塀基礎・掘跡	8㎡
Tr-7	2009	信弘霊屋表門西(高木植栽)	13㎡	Tr-16	2010	外周塀基礎・掘跡	7㎡
Tr-8	2009	近代墓所周辺(中木植栽)	17㎡	Tr-17	2010	外周塀基礎・掘跡	8㎡
Tr-9	2010	幸道霊屋東部	18㎡	Tr-18	2010	松寿院外周塀跡	1㎡

(2) 山門跡・参道調査区

調査区の現状と修理 総門から本堂へ続く参道や山門跡には、石畳状に切石材が敷設されている。この敷石は、長年風雨にさらされてきたことから、石材の劣化や不陸が生じ、歩行に支障のある状況であった。そのため、整備事業では山門跡・参道の修理工事を実施している。修理に際しては、事前に現状の詳細を記録し、施工中も必要に応じて立会・確認調査を実施している。

調査概要 修理工事に伴い、山門跡の礎石12個を取り外したところ、現在露出している礎石の直下から別の礎石が検出された。この新たに発見された礎石は、直径60cm前後の大きな石材で、柱を乗せるための46cm四方の平面を有する台の中央に、ホゾ穴が加工されている。材質は、現礎石が柴石(柴溶結凝灰岩)の模相を呈しているのに対し、下部礎石は皆神石(皆神山火山岩)の模相を呈している。現礎石は明治5年(1872)の火災で焼失した建物礎石と想定されているため、下部礎石はそれ以前の建物礎石である可能性が高いが、築造時期の詳細は不明である。



0 (1:300) 5m

山門跡



A-A' 断面図 (S=1:100)



B-B' 断面図 (S=1:100)



C-C' 断面図 (S=1:100)

第4図 山門跡・参道調査区



山門敷石下部の土層堆積状況



山門礎石と下部より検出された礎石

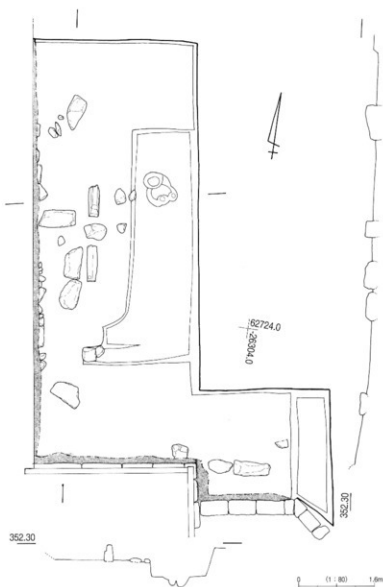


検出された下部礎石

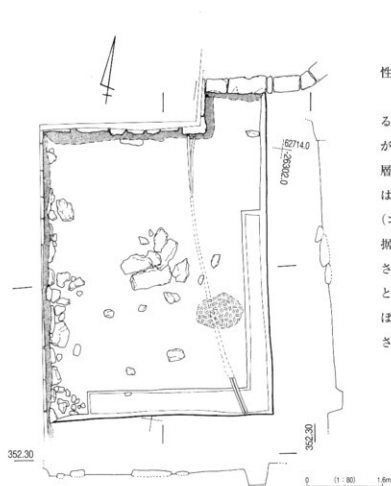
(3) 霊屋区画堀・門（平成19・20年度）

調査概要 霊屋区画を囲む現在の土堀は、霊屋建造物の管理目的で昭和40年代に構築されたものといわれているが、老朽化が著しく倒壊の危険性が高いために、整備事業において改修することとなった。土堀は、コンクリート基礎の上に設置されているが、「境内全図」(P.7)と比べて位置が変化している可能性があるため、堀の位置、構造、控柱の有無などの確認を行った。調査は現状の堀基礎及び土層堆積状況の確認を基本とし、平成19年度に2箇所（第1・2トレンチ）、平成20年度に4箇所（第3・4・5・6トレンチ）の調査区を設定した。

信之霊屋表門周辺 信之霊屋表門の北側に設定した第1トレンチ（Tr-1）は、「境内全図」に描かれている水路跡の検出を目的としたが、調査区において明瞭な江戸時代の遺構を確認することはできなかった。既存土堀際には、基礎石に使用されたと思われる加工石材が点在して検出されたが、周囲及び下部の状況から人為的に据えられたものではなく、現土堀建築の際に外して置いたものと思われる。出土遺物としては瓦片の出土量が多く認められた。信之霊屋表門の南側に設定した第2トレンチ（Tr-2）では、トレンチ中央部にて土層の落ち込みと集石及び焼土跡が確認されたが、堆積土中には近代以降の陶磁器が包含されており、江戸時代の遺構の可能



第5図 第1トレンチ調査区



第6図 第2トレンチ調査区

性は極めて低い。

各トレンチとも、土層堆積状況を確認するため深掘りのサブトレンチを設定したが、近代以降の造成盛土と思われる堆積土層しか確認されず、霊屋築造に関する情報は得られなかった。一方、現在の土塚基礎（コンクリート造）の下部からは、列状に据えられている自然石及び加工石材が検出された。検出された石材の設置時期は判然としないが、現在の霊屋区画の位置がほぼ江戸時代と同じ位置である可能性が推察される。



第1トレンチ調査区（北東より）



第1トレンチ調査区（北より）



第2トレンチ調査区（南より）

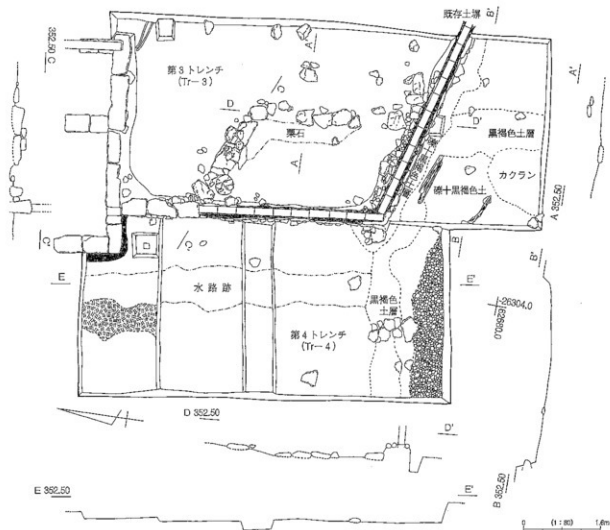


第2トレンチ調査区（東より）

信弘壘表門周辺 真田家歴代落主等の墓所へと至る参道と、御壘屋区域を囲繞する土塼との接合部付近を中心に、66mのトレンチ調査区を設定した。現状の土塼があるため、土塼の内側を第3トレンチ (Tr-3) として26m、外側を第4トレンチ (Tr-4) として40mを設定した。

塼内側の第3トレンチからは、塼の礎石と考えられる平石列と、門状施設の礎礎と考えられる礎石が確認された。現土塼に近い部分は、石組が若干乱れているものの、かつての塼と門の遺構と推定される。現在のL字に折れる土塼の南西角から、東側に2mほどの位置で北に折れ、また西に折れるその形状は、「境内全図」に描かれるクランク状の塼と門の表記と一致する。また、検出された平石列と門跡の遺構は、現地表下約45cmの位置で検出されており、調査時には湧水も認められる深さであった。往時とは、地下水位の高さや排水環境などが異なることも考えられるが、現地壘が江戸時代よりも盛土されて高くなっている可能性も高い。

塼外側の第4トレンチでは、幅80cm内外の水路状遺構跡が検出された。「境内全図」には、信之・信弘壘表門の前を北に向かって流れる細い水路が描かれており、この痕跡と思われる。石垣・木杭等の痕跡は認められず、素掘りの簡素な堀であったと思われる。また絵図面に描かれた橋については、明確な痕跡が認められなかった。第3・4トレンチともに調査で確認された遺構は「境内全図」に描かれたものとはほぼ一致した。明治の火災以前には、真田家墓所に続く参道と門が備わっていたことを絵図・遺構の両面から確認することができた。



第7図 第3・4トレンチ調査区



第3トレンチ調査区 (東より)

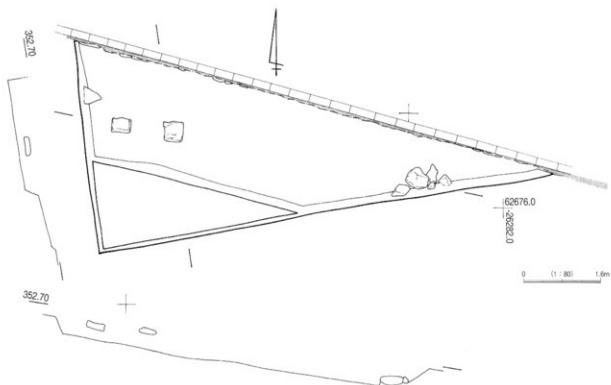


第3トレンチ調査区 (北より)



第4トレンチ調査区 (北より)

信弘霊屋南面 信弘霊屋を囲む土塼のうち、南面に位置する塼について、現状の土塼の南側に第6トレンチ (Tr-6) として22mを設定した。「境内全図」に描かれている塼と、現状の既存土塼とを比較し、角度にずれが存在する可能性があるため、調査を実施したが、平石列等の基礎構造は一切検出されなかった。また、第4トレンチ (Tr-4) の南側拡張区でも、土塼の内側 (Tr-3) から確認された塼礎石の平石列の続きを探したが、存在しなかった。したがって、塼の位置がずれている可能性は低いものと考えられ、むしろ現状土塼の位置と往時の塼の位置が同一である可能性が高まったと思われる。なお、土塼内側の第5トレンチ (Tr-5) については、既存樹木や塼の控柱が密接する状況から掘削は不適切と判断し、表面の精査・観察に留めた。



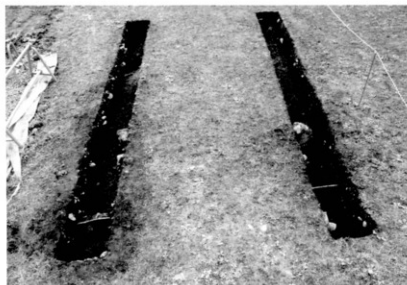
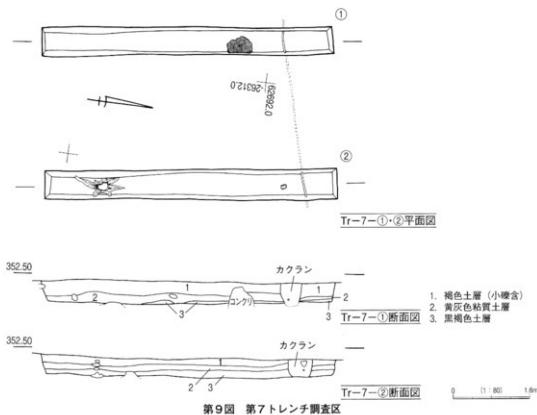
第8図 第6トレンチ調査区



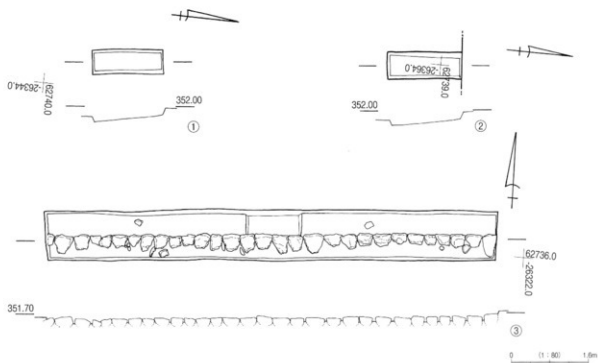
第6トレンチ調査区 (東より)

(4) 植栽位置

調査概要 平成21年度の発掘調査では、平成22年度以降に予定している高木・中低木の植樹等の環境整備予定区域において、事前の遺構確認調査を行った。整備予定地は、いずれも絵図等により建物の存在する可能性が低い場所を選定している。真田信弘霊屋前の第7トレンチ（Tr-7）は、高木植栽予定地であるが、トレンチ内より埋没樹木の根部分が検出され、現在途切れている霊屋西側の高木並木が、以前は南側に続いていたことが判明した。また、第8トレンチ（Tr-8）では、既存高木の根椋乱や近代墓地造成に伴う改変の影響により、江戸時代の明瞭な遺構は確認されなかった。Tr-8③調査区では、東西に伸びる石積みを検出したが、裏盛土の状況から、昭和23年の「真田家之墓」（真田家男爵）造成時に築造されたものと想定される。



第7トレンチ調査区（北より）



第10図 第8トレンチ (Tr-8) 調査区



第8トレンチ①調査区



第8トレンチ②調査区



第8トレンチ③調査区

(4) 信政・幸道靈屋跡周辺調査区

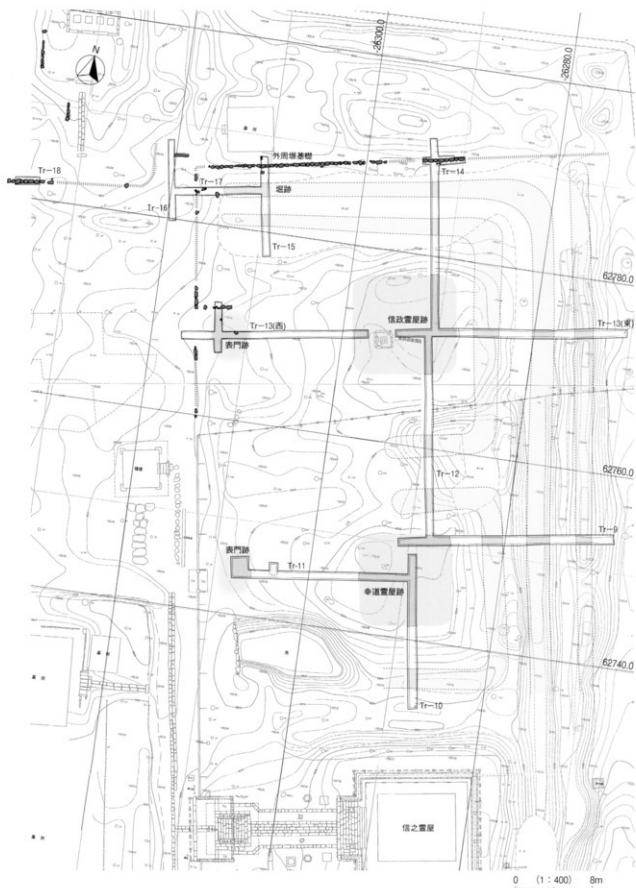
調査概要 調査最終年度である平成22年度には、史跡松代藩主真田家墓所の整備基本計画で「優先的に調査」を実施することとされている真田家墓所区域の靈屋跡周辺を調査した。調査では、墓所区域のうち、明治期以降の移築によって消失している二代信政、三代幸道の靈屋・表門及び外周の堀・塀部分を対象として、幅80cmのトレンチ調査区を10箇所設定した。調査は保存を目的としているため、旧地形想定に必要な腐植土等の除去（約10～15cm程度の表層掘削）のみとし、集石や土質の異なりなどから往時の靈屋周辺を推察することとした。

幸道靈屋跡 調査では、靈屋跡東側に第9トレンチ（18m）、南側に第10トレンチ（13m）、西側に第11トレンチ（18m）を設定し、北側の第12トレンチ（17m）は、信政靈屋跡までを対象とした。現況においても、靈屋跡と想定される位置は、一段高まりとなっている。調査では、この高まりとほぼ同一の約10m四方の範囲において、人為的に敷設されたものと思われる砂礫層を検出した。40cm内外の平石も点在しているが、建物基礎石としての旧状を残しているかどうかは判然としない。検出される礎石数量が少ないことから、建物移築（長国寺開山堂）の際に共に移設された可能性が推察される。砂礫層は、基礎石下の根固めの痕跡と思われる。また第11トレンチの西端部では、靈屋跡と同様に砂礫層が確認されている。ここでは比較的大きめの川原石や正方形の切石が検出されているものの、明瞭な礎石は確認されないことから、靈屋跡と同様に表門基礎石下の根固めと想定される。

信政靈屋跡 調査では、靈屋跡を東西に貫く第13トレンチ（39m）と、靈屋跡北側の第14トレンチ（19m）、また幸道靈屋跡から続く第12トレンチを設定した。信政靈屋跡周辺も幸道靈屋跡と同様に、点在する平石数点以外には、砂礫層しか検出されなかった。ただし、砂礫層の範囲は幸道靈屋跡周辺よりもやや広く約11m四方に広がっている。移築された林正寺本堂（信政靈屋）と長国寺開山堂（幸道靈屋）とを比較すると、林正寺本堂の方が一回り大きく、建物規模と発掘調査成果がほぼ一致している。

外周堀跡 「境内全図」では、靈屋を囲む堀が記されており、各靈屋の外周とその外側を囲む堀、最東部に南北に伸びる堀の存在が描かれている。調査では、靈屋跡周辺トレンチに加え、信政靈屋の北西位置に第15トレンチ（8m）、第16トレンチ（7m）、第17トレンチ（8m）を設定し、堀端部の範囲確認を行った。表層掘削のみの調査であるため、堀の断面形状は不明であるが、植物遺存体や泥炭を多量に含む堀跡と想定される土層が検出されており、堀の推定範囲が判明した。

外周堀跡 本調査区は、樹木が繁茂しており、落葉や枯れ草によって地面が覆われているが、第14・15トレンチの調査では、非常に浅い位置において、東西に伸びる石列が検出された。この石列は、「境内全図」に描かれている堀の位置とほぼ一致するため、第14・15トレンチの検出された石列間について、落葉や枯れ草を撤去したところ、ほぼ一直線に伸びることが確認された。石列は20～40cm前後の自然石及び一部加工石で、上部がほぼ平らになっていることから、以前存在した堀の基礎石と考えられる。同様の形状の石列は、第13トレンチ東端部周辺でも確認されており、第1トレンチで確認された既存土層の下部石列とも酷似する。よって、歴代藩主の靈屋外周を区画する堀跡の北面・西面については、ほぼ位置を確定することが可能となった。一方、東面については、露出する石列は確認されていないため、堀の存在位置は不明である。また、第16トレンチから約12m西において、一部石列の露出が確認された。そこで、第18トレンチ（1m）を設定したところ、東西方向に伸びる長さ約5mの石列が検出された。これは、「境内全図」に描かれる、松寿院の靈屋外周堀の位置と推察される。



第11図 信政・幸道書屋跡周辺調査区全体図



第9トレンチ調査区



第10トレンチ調査区



第11トレンチ調査区



第11トレンチ調査区・西端



第12トレンチ調査区



第13トレンチ調査区・東側



第13トレンチ調査区・西側



第14トレンチ調査区



第13トレンチ調査区・西端部



第14トレンチ調査区・北端



第15・16・17トレンチ調査区



第18トレンチ調査区

第3節 出土遺物

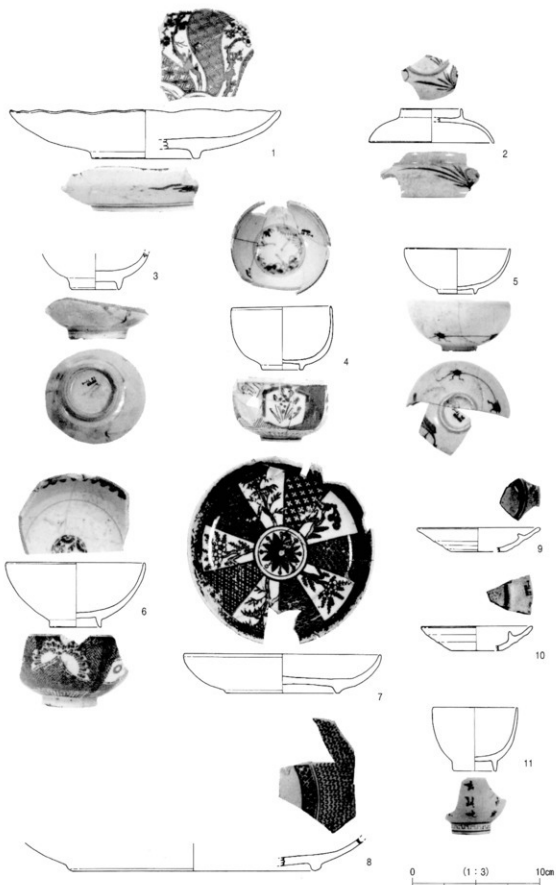
(1) 陶磁器

全体概要 全体的に小破片が多数を占めており、完形もしくはそれに近い個体の出土は見られない。破片も、第4トレンチからは比較的集中して出土したが、その他の多くの調査区では僅かな小片が散見されるのみであった。本整備事業では、遺構の保存を目的とした確認調査が主体であったため、出土陶磁器も、幕末から明治期所産の肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器が多数を占めた。器種は磁器の碗・皿・蓋、陶器の碗・灯明皿などが出土している。

出土陶磁器 1の中皿は、型紙摺・コバルト釉の磁器である。輪花型で松竹梅模様が四方罽・紗綾型・青海波・菱文に挟まれる。2の磁器の小碗蓋は外面に呉須で菊花と草をあしらった草花文が見られる。胎土からも肥前系と思われる。3は陶器の中碗である。緋密な灰白の胎土に鉄釉で草花文を描いていると思われ、上から白化粧土がやや厚めにかけられている。底部に崩れ成化年製銘がみられる。4は磁器の小碗であり、口紅が鉄釉で施され、外面部は鉄釉、呉須で草花・霞文が描かれ、上から朱と緑の絵付けがなされる。内面は呉須で崩れた四方罽文、見込み部分に環状松竹梅、高台に蓮弁文が描かれる。明治以降の瀬戸・美濃製と思われる。5は陶胎染付の小碗であり、呉須で宝珠文が描かれている。6は磁器の中碗であり、型紙摺で蝶・菊花が描かれる。内面口縁に環状文、見込みに環状松竹梅がみられる。7は磁器の五寸皿。コバルト釉で松竹梅が麻の葉・青海波・四方罽・霞文と交互に型紙摺りされる。胎土から肥前系と思われる。8は磁器の大皿。残存部分の文様は型紙摺の徹底草文である。9は陶器の灯明受皿の破片。内側に灰胎を施した油滲が半月状のタイプである。19世紀以降の信楽焼の製品と思われる。10は同じく陶器の灯明受皿破片。油滲は切立状。淡褐色の胎土の内側に白泥をかけている。19世紀以降の瀬戸・美濃製品と思われる。11は磁器小碗であり、呉須で漢詩が書かれる。高台は御歯文である。19世紀以降の瀬戸・美濃製品と思われる。

出土陶磁器観察表

No	年代	出土位置	器種	器数	形状	胎土色	成形	釉付・輪廊	寸法 (cm)			文様・その他				所見			
									口径	器高	底径	外面	内面	見込	裏面	指定地域	推定年代	備考	
1	2007	Ty-2	磁器	中皿	丸型・ 輪花	白	ロクロ	型紙摺・コ バルト・通 明釉	(21.0)	3.8	(8.8)	宝文(高梁)	鉄・砂・ 青海波・紗 綾・菱文	無し	無し	瀬戸・ 美濃	1878-		
2	2007	Ty-1	磁器	蓋	中碗・ 広島型	白	ロクロ	呉須・漢詩 繪	(10.0)	2.7	(4.8)	草花文	二重輪 内面草花 文?	無し	無し				
3	2008	Ty-4	陶器	碗	一	灰白	ロクロ	鉄釉・白化 粧土・漢詩 繪	—	—	4.0	草花文	—	—	二重 輪			定規係 成化年製	
4	2008	Ty-4	磁器	小碗	丸型	白	ロクロ	呉須・白化 粧土・通 明釉	7.0	6.0	3.2	霞文・草 花文・蓮 弁文	二重輪 口縁松竹 梅文	無し	無し	瀬戸・ 美濃	1870- 1910		
5	2008	Ty-4	陶胎染 付	小碗	横丸型 小高台	白	ロクロ	呉須・漢詩 繪	—	3.6	(3.0)	宝珠文・ 獅子	無し	無し	無し	肥前			
6	2008	Ty-4	磁器	中碗	横丸型	白	ロクロ	コバルト・ 通明釉	(11.6)	6.1	(4.0)	麻・鉄 ・砂・ 青海波・ 菱文	口縁松竹 梅文	型紙摺一 環状松竹 梅文	無し	無し	瀬戸・ 美濃	1880- 1910	
7	2008	Ty-4	磁器	五寸 皿	丸型 広口	白	ロクロ	コバルト・ 通明釉	15.7	3.0	9.0	無し	型紙摺 松竹梅 文	花文	無し	肥前?	口縁区 間菱文		
8	2008	Ty-4	磁器	大皿	(丸型)	白	ロクロ	コバルト・ 通明釉	—	—	(10.0)	無し	型紙摺・ 徹底草 文	無し	無し	瀬戸・ 美濃	1880- 1910		
9	2008	Ty-4	陶器	灯明 受皿	(横型半 円状)	灰褐色 土	ロクロ ・削付	灰釉	(0.7)	1.9	(4.3)	無し	無し	無し	無し	信楽	1800-	底彫糸 切	
10	2008	Ty-4	陶器	灯明 受皿	(横型 切立状)	灰褐色 土	ロクロ ・削付	白泥	(8.0)	1.9	(4.0)	無し	無し	無し	無し	瀬戸・ 美濃	1800-	底彫糸 切	
11	2009	Ty-7	磁器	小碗	横丸型	白	ロクロ	呉須・ 漢詩繪	6.8	6.0	3.4	漢詩・?	無し	無し	漢詩 文	瀬戸・ 美濃	1800-		



第12图 出土陶磁器·土器

(2) 出土瓦

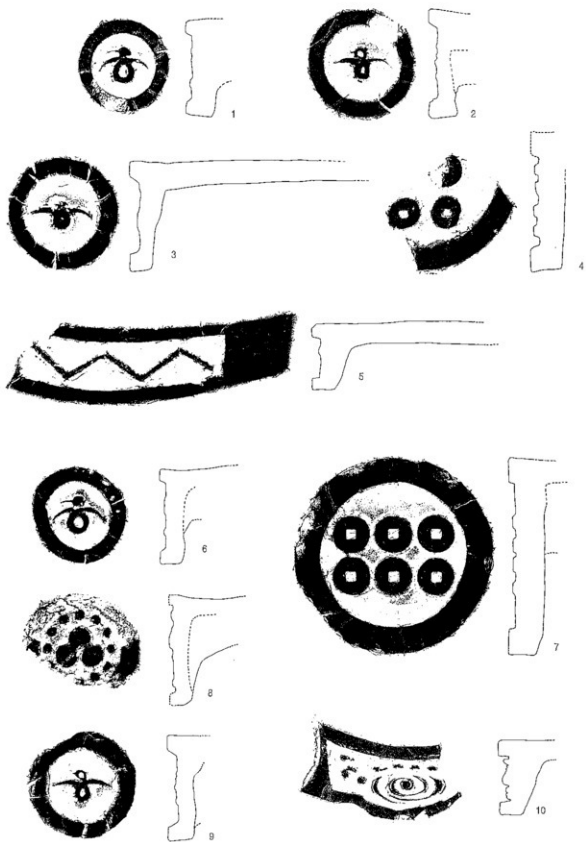
全体概要 松代藩主真田家の歴代霊屋は、当初こけら葺きであったが、18世紀に至って棧瓦葺きに改められたと考えられている。棧瓦葺きに変更した時期は明らかではないが、天明4年(1784)の銘札から、この時期には瓦葺きになった可能性が高い。この後も、嘉永4年(1851)、明治中頃、大正末年、昭和初年、昭和26年に、屋根・軒廻りの修理が行われており、昭和53年から昭和55年に実施した信之霊屋の修理工事では、棧瓦葺きをこけら葺きに復している。調査では、多量の瓦が出土しているが、江戸時代の遺構に伴うものではないため、出土瓦の生産時期は判然としない。ここでは、出土した棧瓦のうち、残存状況の比較的良好な軒瓦16点を抽出し、図化することとする。

出土瓦の特徴 出土した軒瓦は、信之霊屋表門周辺の第1・2トレンチ、信弘霊屋表門周辺の第3トレンチ、南部外周塀際の第6トレンチの4箇所集中している。そのうち軒丸瓦は4、7、13の3点のみであり、全て真田家の家紋である六文銭文である。一方、多数を占める軒棧瓦では、結び雁金文、連珠洲浜文、六文銭文、連珠三巴文などバラエティー豊かな丸部と、山道文、唐草文の平部が確認されている。多数出土している結び雁金文も、全て同純瓦ではなく、少なくとも3種類の違いが存在している。また、軒棧瓦においては、正面から見た時に、丸部が左側にあたるのが一般的であるが、ここでは6、11、16の3点は右に丸部が存在している。これは、建物の妻側における右下りの屋根軒先に取り付く瓦と想定され、比較的数量が多かった可能性がある。

これまで松代地区では、松代城跡において多量の軒棧瓦が出土しているが、松代城跡で出土している軒棧瓦の丸部は、結び雁金文か連珠三巴文のどちらかのみである。本調査で出土している、六文銭文、連珠洲浜文を丸部に用いた軒棧瓦は、初見となる。ただし、この軒瓦が江戸時代に制作されて松代城跡には使用されなかったものなのか、廃城以降に長国寺のために制作された瓦なのかは判然としない。

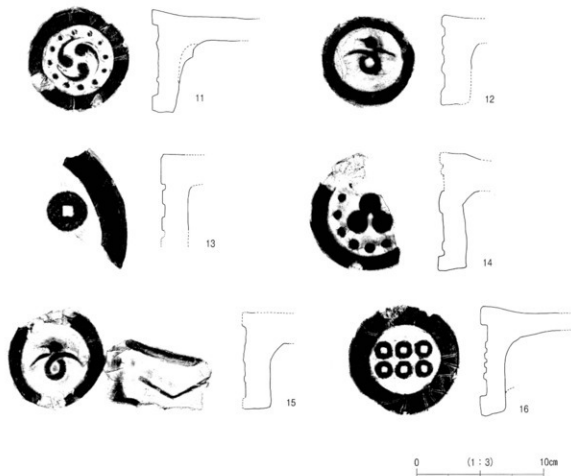
(3) 出土金属製品

全体概要 本調査において出土した金属製品は全て頭巻釘であり、霊屋等の建物資材に利用されたものと想定される。出土した11点のうち、8点は二代信政霊屋跡を東西に貫く第13トレンチから集中して出土している。トレンチの中でも、釘が検出されているのは、建物の基礎根固めと想定されている砂濎層からの出土のみである。釘の大きさは、7の約18.5cm以外は、ほとんど10cm内外であり、長さが近似している傾向がみられる。出土した釘の生産年代は定かではないが、出土状況から考えると、江戸時代の修理時のものか、昭和27年(1952)の林正寺本堂への移築の際に落下したものが想定されるが、あくまでも表層掘削の範囲で出土しているため、推測の域を出ない。



0 (1:3) 10cm

第13图 出土瓦 1



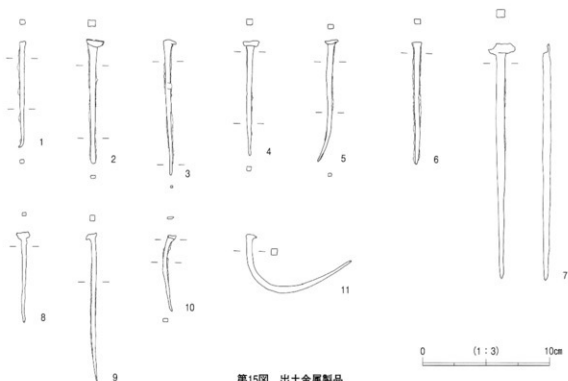
第14図 出土瓦2

出土瓦観察表

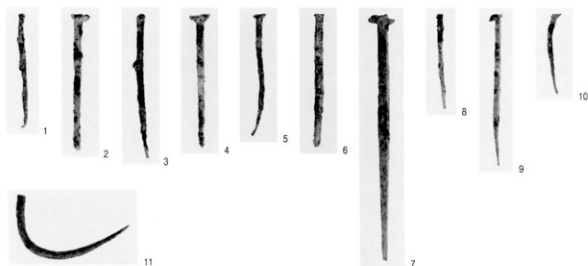
No	年度	出土位置	種類	厚さ(cm)	文様・他
1	2007	Tr-1	軒棧瓦	1.8-2.2	丸部：結び雁金文 平部：一
2	2007	Tr-1	軒棧瓦	0.9-2.0	丸部：結び雁金文 平部：一
3	2007	Tr-1	軒棧瓦	1.4-1.9	丸部：結び雁金文 平部：一
4	2007	Tr-1	軒丸瓦	1.8-2.3	丸部：六文銭文 推定径：11.0cm
5	2007	Tr-1	軒棧瓦	1.7-2.4	丸部：一 平部：山道文
6	2007	Tr-2	軒棧瓦	1.4-2.1	丸部：結び雁金文 平部：山道文
7	2007	Tr-2	軒丸瓦	2.2-2.7	丸部：六文銭文 推定径：15.4cm
8	2007	Tr-2	軒棧瓦	1.4-2.2	丸部：連珠洲浜文 方部：一
9	2007	Tr-2	軒棧瓦	1.4-2.1	丸部：結び雁金文 方部：一 丸部推定径：8.5cm
10	2007	Tr-2	軒棧瓦	1.8-3.1	丸部：一 方部：唐草文
11	2008	Tr-3	軒棧瓦	1.6-3.0	丸部：連珠三巴文 方部：一
12	2008	Tr-3	軒棧瓦	2.1	丸部：結び雁金文 方部：一 丸部推定径：7.3cm
13	2008	Tr-3	軒丸瓦	2.1	丸部：六文銭文 推定径：15.8cm
14	2008	Tr-6	軒棧瓦	1.9-2.3	丸部：連珠洲浜文 方部：一
15	2008	Tr-6	軒棧瓦	1.5-2.9	丸部：結び雁金文 方部：山道文
16	2008	Tr-6	軒棧瓦	1.3-2.5	丸部：六文銭文 方部：一



出土瓦写真



第15図 出土金属製品



出土金属製品観察表

No	年度	出土位置	種別	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特記事項
A-1	2009	Tr-7	釘	頭卷釘	6.6	0.6	0.4	
A-2	2010	Tr-11	釘	頭卷釘	8.7	1.4	0.3	
A-3	2010	Tr-13(東)	釘	頭卷釘	10.7	1.1	0.4	
A-4	2010	Tr-13(東)	釘	頭卷釘	9	1.3	0.5	
A-5	2010	Tr-13(東)	釘	頭卷釘	9.6	1.1	0.5	
A-6	2010	Tr-13(東)	釘	頭卷釘	9.5	0.8	0.4	
A-7	2010	Tr-13(西)	釘	頭卷釘	18.5	2.1	6	
A-8	2010	Tr-13(西)	釘	頭卷釘	7	1	0.3	
A-9	2010	Tr-13(西)	釘	頭卷釘	11.6	0.9	0.5	
A-10	2010	Tr-13(西)	釘	頭卷釘	6	0.7	0.4	
A-11	2010	Tr-15	釘	頭卷釘	8.4	0.8	0.5	

第IV章 結語

第1節 松代藩主真田家墓所の成立過程について

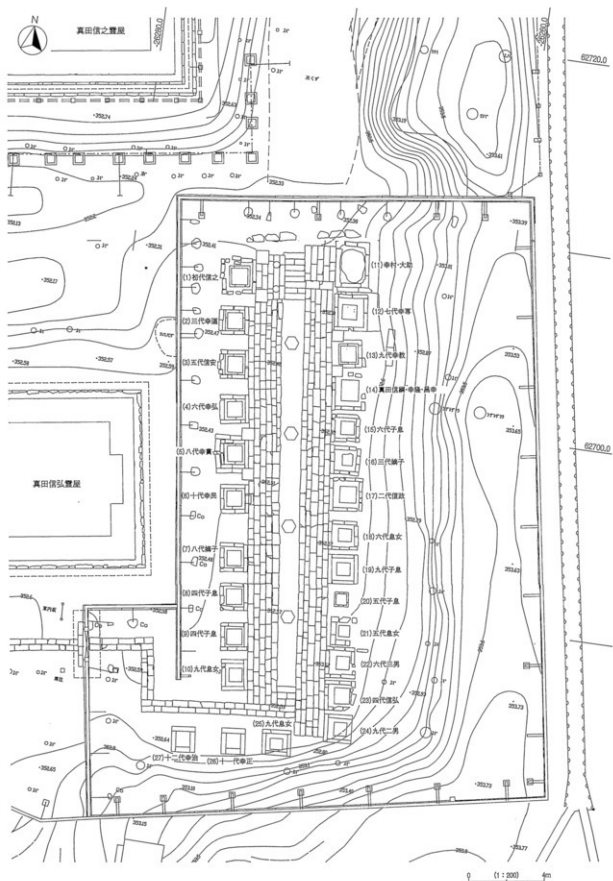
絵図からみる霊屋と墓所 長国寺奥部の墓所区域について、当初の平面形状を描いた絵図としては、「長国寺図面」が存在する。この絵図には、「一當様」（初代信之）と「一中様」（二代信政）の2棟しか霊屋が記されていないため、信之・信政の霊屋を建立した万治3年（1660）から三代藩主幸進の霊屋を建立した享保12年（1727）までの境内の様子と推察される。各霊屋は、表門と塀に囲まれており、その外側に「土手」が巡っている。土手の南・東・北には「総堀」が描かれている。「境内全圖」は、明治5年の火災以前の伽藍平面図であり、約100分の1の縮尺で長国寺境内の詳細が図化されている。火災により焼失した本堂・庫裡・山門などと共に、火災後の住持の仮住居が、二代信政霊屋と三代幸進霊屋の間に建てられたことが分かる。また霊屋や堀の位置関係を「長国寺図面」と比較すると、三代幸進霊屋は、初代信之と二代信政の霊屋間の土手の位置に、四代信弘霊屋及び真田家墓所（真田家葬地）は、当初の敷地を南に拡大して造成されていることがうかがえる。よって、真田家墓所は、当初から計画されていたものではなく、後代に造営された可能性が考えられる。

真田家墓所の成立 現在、真田家墓所には、歴代藩主及び藩主子息など27基の石造物が存在する。昭和40年代の松代群発地震の際に、多くの石造物が転倒、破損したことが予想されるが、石造物基礎部及び敷石等を修理した痕跡はほとんど無いため、宝篋印塔の塔身以下は元位置を保っているものと推測される。歴代藩主の設置位置に規則性は無く、風時空いている箇所にも掘えられた状況が噂される。中でも、西列北端に位置する初代信之の宝篋印塔や石灯籠、鳥居等は、前述した「長国寺図面」に記載が無く、信之の霊屋建立時とは異なる時期に作られた可能性が高い。

初代藩主信之については、隠居地である柴にて茶屋に付されたといわれており、大録寺（現松代町柴）にも万治元年（1658）の記銘を有する宝篋印塔が存在する。その後、松代藩真田家の養子となり家督相続をした七代幸専や八代幸貫は、藩祖信之をはじめとする歴代藩主の祭祀に尽力したことで知られる。幸専による文化10年（1813）の白鳥神社の改築及び信之の合祀や、幸貫による文政7年（1824）の大録寺信之墓所の石灯籠や鳥居等の新築、長国寺真田家墓所内の真田信綱・幸隆・昌幸供養碑建立などは、真田家の祖先祭祀として行われたものである。

また、八代藩主幸貫の葬式について記した「長国寺御霊屋之図」には、長国寺における棺の順路と、藩の役人・装具の配置等と共に、本堂奥の墓所区域の様子が描かれており、4棟の霊屋と鐘樓、位牌堂が記されている。「一御霊屋」（四代信弘霊屋）の奥には、17基の墓石が並ぶ真田家墓所区域が描かれ、西列中央の位置に幸貫の石塔の掛紙が貼られている。幸貫の死去した嘉永5年（1852）頃には、真田家墓所内の歴代藩主石造物群や敷石、石灯籠等が現況に近い状態で設置されていたことが絵図から読み取れる。

今後の課題 今回の整備事業では、破損の進む参道や石造物の修理、霊屋外周木構等の整備などにより、往時の長国寺境内及び霊屋周辺の環境に近い状況が再現されている。発掘調査では、外周塀・堀跡・霊屋跡・表門跡など、霊屋跡や墓所区域の広域において遺構を検出しており、長期計画である塀の形状整備や霊屋の移築復元などを実施するための重要な参考資料を確認することができた。一方、調査からは江戸時代の霊屋や墓所区域の変遷についての明瞭な痕跡は確認できず、今後の課題となっている。江戸時代の貴重な大名家墓所である本史跡を、より良い環境で後世に引き継いでいくために、計画的に調査や保存整備を進め、霊屋周辺区域の景観復元を目指した継続的な取り組みが進められることが期待される。



第16図 真田家基所平面图



(1)初代信之



(2)三代幸道



(3)五代信安



(4)六代幸弘



(5)八代幸貫



(6)十代幸民



(7)八代嫡子



(8)四代子息



(9)四代子息



(10)九代息女



(11)幸村・大助



(12)七代幸専



(13)九代幸教



(14)真田信綱・幸隆・昌幸



(15)六代子息



(16)三代嫡子



17代信政



18代息女



19代子息



20代子息



21代息女



22代三男



23代信弘



24代二男



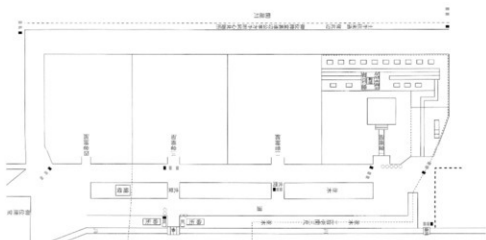
29代息女



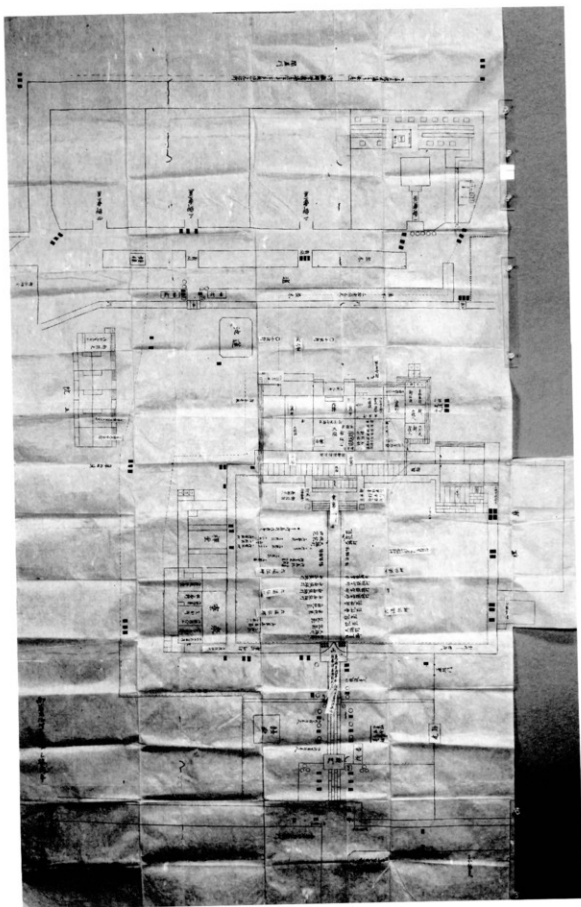
31代幸正



32代幸治



第17図 長国寺御堂屋図リライト (岩淵2006より一部転載)



長国寺御露屋園 (松代文化施設等管理事務所蔵)

引用・参考文献

- 岩瀬幸治 2006 『真田家と善徳寺—江戸を中心に—』『松代』第20号 真田宝物館
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 江戸東京博物館編 1993 『江戸東京博物館総合案内』財団法人江戸東京歴史財団
- 大塚初重ほか 1994 『八百八町の考古学』シンポジウム江戸を掘る 山川出版社
- 大橋康二 1988 『肥前磁器の変遷図』『別冊太閤 古伊万里』日本のこころ63 平凡社
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 2000 『九州陶磁展覧会』九州陶磁の歴史 九州近世陶磁学会10周年記念 図録
- 大橋康二 1995 『建築史からみた発掘資料』『季刊考古学』第53号 特集◎江戸時代の発掘と文化 雄山閣出版
- 竹村建築設計事務所 1984 『県宝真田信弘墓屋及び表門保存修理工事報告書』真田信弘墓屋及び表門修理委員会
- 北原糸子 1999 『江戸城外堀物語』ちくま新書209 筑摩書房
- 北村 保 1987 『松代藩士の見聞録にみる江戸後期の松代城下町』『松代—真田の歴史と文化—創刊号 真田宝物館
- 北村 保 1992 『近世松代火難雑考』『松代—真田の歴史と文化— 第5号 真田宝物館
- 北村 保 1993 『享保二年松代城額火災記録』『松代—真田の歴史と文化— 第6号 真田宝物館
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』—近世考古学への招待— 柏書房
- 古泉 弘 1985 『江戸の街の出土遺物 —その展覧—』『季刊考古学』第13号 特集◎江戸時代を掘る 雄山閣出版
- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』考古学ライブラリー48 ニュー・サイエンス社
- 文化財建造物保存技術協会 1980 『重要文化財真田信之墓屋(宝殿・表門)修理工事報告書』真田信之の墓屋修理工事委員会
- 斎藤 進 1997 『沙留遺跡における上水施設について』『沙留遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
- 坂路智美 1999 『江戸城下町における「水」支配』専修大学出版局
- 佐々木邦博・米林由美子・平岡直樹 2001 『城下町松代(殿町地区)において江戸時代に造られた泉水路の形成過程とその用途』『日本造園学会誌』VOL.64 NO.5 日本造園学会
- 佐々木邦博 2003 『松代城下町絵図に見られる水路について』『松代』第16号 松代藩文化施設管理事務所
- 佐々木達夫 1985 『物資の流れ —江戸の陶磁器—』『季刊考古学』第13号 特集◎江戸時代を掘る 雄山閣出版
- 信州大学工学部建築工学科松本研究室 1984 『長野市松代三町伝統環境保存計画策定調査報告書』
- 竹内誠監修 2002 『ビジュアルガイド江戸時代館』全1巻 小笠原
- 田中誠三郎 1979 『真田一族と家臣団 —その系譜をさぐる—』信濃路
- 裏 園 寺 2005 『史跡松代藩主真田家墓所整備基本計画書』
- 長野市教育委員会 1982 『真田都市 松代』伝統的建造物群保存対策調査報告書
- 長野市教育委員会 1984 『調いのある真田都市づくり』
- 長野市教育委員会 1985 『史跡松代城跡附新御殿跡 整備基本計画書』長野市
- 長野市教育委員会 1993 『史跡 松代藩主真田家墓所』長野市の埋蔵文化財第59集
- 長野市教育委員会 1995 『史跡松代城跡附新御殿跡整備事業実施計画書』長野市
- 長野市教育委員会 2003 『新御殿跡整備基本計画書』—史跡松代城跡附新御殿跡環境整備事業— 長野市
- 日本貨幣商協同組合 2001 『日本貨幣カATALOG』
- 林英夫・青木美智男編 2001 『事典 しらべる江戸時代』柏書房
- 須矢 哲男 2001 『甲信地方における肥前陶磁の出土状況について』『国内出土の肥前陶磁』第11回九州近世陶磁学会資料
- 堀越 正雄 1995 『日本の上水』増補改訂 新人物往來社
- 本田博太郎 1970 『松代町の民家』長野県教育委員会
- 松田 之利 2003 『真田帝賞の初期簿政』『市誌研究ながの』第10号 長野市誌編さん委員会
- 松代藩文化施設管理事務所 1999 『城下町松代』真田宝物館開館30周年記念 特別展図録
- 松代文化施設等管理事務所 2009 『真田寺 調査報告書』
- 松代文化施設等管理事務所 2010 『松代 白鳥神社調査報告書』

報告書抄録

ふりがな	しせきまつしほはんしゆさなだけほしよ							
書名	史跡松代藩主真田家墓所							
副書名	史跡松代藩主真田家墓所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宿野隆史、北村美弥子							
編集機関	長野市教育委員会							
所在地	〒380-8512 長野県長野市大字鶴賀緑町1613番地 TEL 026-224-7013・FAX 026-224-5104							
発行年月日	2011年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
松代藩主 真田家墓所	長野県長野市松代町松代	20201	F-034	36° 33' 53"	138° 12' 22"	20071126 ～ 20071217	67㎡	確認調査
						20071126 ～ 20071217	88㎡	確認調査
						20091013 ～ 20091020	30㎡	確認調査
						20101012 ～ 20101102	148㎡	保存 目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松代藩主 真田家墓所	社寺	江戸時代	霊屋跡、堀跡、塀跡、水路跡など	陶磁器、金属製品（釘）、瓦など				
要約	史跡松代藩主真田家墓所の整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施した。調査では、整備工事に伴う遺構の確認調査と、長期整備計画に基づく霊屋跡等の保存目的調査を行った。整備工事に伴う遺構の確認調査では、霊屋外周の既存土塀基礎が江戸期の基礎の上に設置されていることが判明した。また絵図に描かれている真田家墓所に続く門跡も検出されている。長期整備計画に基づく保存目的調査では、信政霊屋跡及幸道霊屋跡の明瞭な礎石は検出されなかったが、建物の基礎地業と推定される砂檜層や堀跡、塀跡等が確認され、霊屋周辺の形状がほぼ推定できる重要な成果があった。							

2011年3月14日 印刷

2011年3月25日 発行

史跡松代藩主真田家墓所

—史跡松代藩主真田家墓所整備事業に伴う風蔵文化財発掘調査報告書—

著作権所有 長野市大字鶴賀緑町1613番地
発行者 長野市教育委員会
印刷者 長野市差出南1丁目15-17
法規書籍印刷株式会社